

## 第五夜 籠城ゲーム

「ギムレット」

男はコートを壁のフックにかけながらオーダーした。まだ夏の名残が色濃い秋口にそのコートが珍しいのか、カウンターの隅の先客達がこちらをちらちらと窺っている。その視線には無頓着に男は静かにスツールに腰を沈めた。

老練なマスターは無言で領き、冷蔵庫からジンとライムジュース、丸い氷を出す。慣れた手捌きでシェーカーを振ると男の前にコースターを置き、よく冷えたマティーニグラスを載せた。薄緑色の液体がシェーカーから注がれるのを男は黙って見詰めている。

マスターが注ぎ終わると、男はライムの香りを確かめてから、軽く煽って太い息を吐いた。ようやくやく人心地ついたという顔で店の中を改めて見回す。刃物のように鋭い視線とぶつかって先客達が慌てて目を逸らした。

小さな音に男は振り向いた。男の前に白い小鉢が置かれている。

「こいつはなんだ」

男がねばり気のある視線でマスターを見遣った。

「今度こそほんまもんの心霊現象ですて」  
しのぶの甲高い声が酔鏡の店内に響く。

「いや、八月の山下さんの時のように勘違いなさっているだけという予感をひどく感じるのですが」

隣でセンスが持って回ったような執り成し方をする。開店から小一時間、酔鏡の客は珍しい取り合わせの二人だけだ。一番ビールを手中に収めたセンスはビールを干して二杯目を何にするか思案しながら目を泳がせている。しのぶの前にはいつもの熱燗に平皿が置かれていた。

「走りの秋鮭やな。バターでローストしてしめじや舞茸など茸を添えましたという趣向や」

「上に散らしてる黒いのは何ですのん？」

「鮭の皮を軽く揚げて微塵に刻んだものに塩、山椒を合わせてシーズニングにしてみてん」

口に入れるとバターを利かせた鮭の身を香ばしい皮のシーズニングが引き立てて食欲が刺激される。

「めっちゃ美味しいです」

しのぶが歓声を上げると主人は満足げににっと笑った。壁のホワイトボードには、

お品書き

## 秋の風

と達筆な字で書かれている。

「まだまだ暑いけど走りのもんがぼちぼち出始めてるねん。夏の名残を惜しみながら一足先に秋を楽しんでもらおう趣向や」

物問いたげなセンセの先回りをして主人が答えた。

「ちよつと小腹が空いてるんです。何か揚げ物でお腹にたまる物をお願いします。それに合わせて日本酒を」

酔鏡にはレギュラーメニューがほとんどない。壁のホワイトボードには一言その日のメニューのテーマだけが書かれているので初めての客はもちろん常連たちでも毎度戸惑う。だが客がてんでに「揚げもんを」とか「何やさっぱりしたやつ」とか「激辛の肴あるかな」とか適当に料理のイメージを伝えると不思議とイメージ通りの料理が出てくる。期待が外れることはまずない。主人の慧眼は長らく客達の間で持ちきりの謎だ。

「そういうえばあたし、バリキさんやユウやんと八月以来会ってませんわ。元気にしてはりますか？」

「ああ、ちよこちよこ顔出してはるで。けど、ユウやんはここんとこ忙しいみたいやな。何でも知り合いが主催してる劇団で起きてるトラブルの解決を頼ま

れたんやて」

「何ですのんそれ？」

しのぶが口に持って行きかけた猪口の手を止めて不思議そうな声を上げた。

「例のライバル劇団に主演女優を引き抜かれたとかいうやつですか？」

「ええっ、ユウやんて演劇関係者やったんですか？」

「いえそうではなくて、別に劇団に限らずそういったトラブルを解決するのがユウやんの仕事なんですよ」

しのぶが要領を得ない顔つきで首を傾げる。

「ある種の便利屋というんですかね。誰とでもすぐ友達になれて、とにかく友達を大切にする人でしょ。それに職業や地位で人を見下すことをしない。一度友人になった人間をユウやんが忘れることはないが不思議と相手も忘れないらしいのです。内外に数千人は友人がいると聞いたことがありますよ。で、友人達はもとよりその知人からもトラブルに巻き込まれたと頻繁に相談が持ち込まれるようになって、特に看板を上げているわけではないのですけど、いつの間にもやらそれで謝礼をもらう便利屋になったそうです」

「へえ。でもどうやって解決しはるんです」

「ユウやんの武器は情報とコネクションです。電話一本で検索エンジンなど目ではないデーターで正確な情報をピンポイントで掴めると言っていました。誰を

動かせば解決に至るかの見極めが巧くて、仲裁のシナリオも描ける。提示する条件は示談屋顔負けと言いますから、ああ見えて困った時は結構頼りになる人なのです」

「へえ、人は見かけによらんですねえ」

二人とも微妙に失礼である。

「けど、今日はホンマに静かですね」

しのぶは猪口を煽って店の中を見回した。もとより客は二人だけである。

「ま、そういう日もあるて。けど、俺の経験からすると宵の口が静か過ぎると後でどーんとお客が来てえらい忙しい目に遭うたりするねんなあ」

主人が格子戸の方を見遣った。と、間の良いことにその立て付けの悪い格子戸がガタガタと音を立てて力任せに開かれた。まだ暮れ残る夕日を背にして大きな人影が立っていた。

「いらっしやい」

主人は商売人の顔に戻って威勢の良い声を張った。上背が百八十はありそうな大きな男が無言で入ってきた。

「ギムレット」

男はコートを壁のフックにかけながらオーダーした。秋口とはいえ、まだ残暑が厳しい時候にそのトレンチコートはいかにも不似合いでしのぶは何か言

いたそうにセンセを見遣った。

主人は眉一つ上げずに黙って頷くと冷蔵庫からジンとライムジュース、丸い氷を取り出した。棚から銀色のシェーカーを取り出す。

「見ました？あたしこのお店にシェーカーがあるやなんて初めて知りまして」  
殊更声をひそめてしのぶが言うのとセンセは黙って頷いた。主人は慣れた手付きでシェーカーを振ると男の前にコースターと冷えたマティーニグラスを置いて薄緑色のカクテルを注いだ。

「うわっ、あんなグラスもあたし初めて見ましたわ」

声は密やかなのだが、テンションはフォルテシモなので店中に聞こえやしないかとセンセは気を揉んだ。男が口をつけるのを待って主人はジンとライムジュースの瓶を冷蔵庫に戻す。

「あの冷蔵庫、四次元ポケットちゃいます？そのうち樽酒とか出てきたりして」  
いや、それは永遠にない。

「かつこええ、なんや西部劇みたいですよん」

「せめてハードボイルドと言って下さい」

二人はひそひそ声で会話を続ける。男のがたいはバリキと良い勝負で、年を重ねている分貫禄があった。年齢は五十半ばといったところか。髪はべったりとポマードを付けてやくざの幹部風。眉は太く顔のパーツも総じて大振り、眉

間に深く刻まれた皺は見ている方が緊張してきそうだ。男はギムレットを軽く煽ると太い息を吐いた。男の緊張が弛緩するのが手に取るように分かった。人心地ついた顔で店の中を見回す男の視線がしのぶとぶつかる。猪口を傾けていたしのぶは派手にむせて慌てて目を逸らした。主人が白い小鉢を置くのが見えた。

「こいつはなんだ」

男は少し目を細めて睨め付けるように主人を見遣った。

「お付け出しみたいなものと思うて下さい。お客さん今、メニュー探さはりましたやろ。けど、どんなオーダー頂いても出すまでにカクテルは半分がとこなくなってしまう。口寂しいのは申し訳ないなと思うて、おしのぎのつもりで出しました。お気に召さんようでしたら引っ込めます」

男は黙って箸立てから割り箸を取ると小鉢の中身をつついた。

「こいつはなんだ」

同じセリフだがニュアンスが違う。

「にんにくの芽のピクルスです。洋酒に合う肴はいろいろあるけど案外に漬物やピクルスもイケますよ。変わったところで中華風ににんにくの芽を使ってみました」

主人の言うがままに男は小鉢の中身を箸で摘んで口に入れた。暫く男はカク

テルとの相性を確かめるように味わっていたが終に口を開くことはなかった。ただカクテルの残りを呑み干すとお任せでバーボンのロックをオーダーした。「あとう」

しのぶがおそろるおそろる手を挙げた。バーボンのグラスに無言で口をつける男をチラチラと見遣っている。

「あたしもおんなじやつを」

なぜかひそひそ声でオーダーする。主人は頷いて冷蔵庫から小鉢を一つ取り出した。

「日本酒にもよう合うで」

主人の言葉を聞きながらしのぶが箸を伸ばそうとした時、唐突に店の中にゴッドファーザーの愛のテーマが荘厳に響いた。しのぶは肩を震わせて中途半端に箸を止めたまま店の中を見回したがもとより客は三人しかいない。男はウイスキーのグラスをカウンターに戻すと慌てる素振りもなくスーツの内ポケットから携帯電話を取り出した。

「うわ、見ました？」

しのぶがあからさまに指を差したのでセンセは肝を冷やした。男のスーツの裏地には派手な虎の刺繍が施されていた。

「はい」



男は静かな、それでいて相手を威圧するような声で電話に出た。電話の相手は何やら興奮している様子で甲高い音声がしのぶ達の方まで聞こえてきた。

「なんやと」

不意に男が声を荒らげた。三人は固唾を呑んで男を見守る。

「月末までノーチェックのはずやぞ。なんでこないに中途半端な時期に……。とりあえず、おおきに。助かったわ」

男は手短かに話して電話を切るとすぐにどこかに電話をかけた。

「加藤か？例の隠し金の件でそっちに電話行ってないか？……。使い込み言うな。人聞きが悪い……。そうか、まだ手は回ってないな。なら、先手必勝や。悪いけど今からそっち行くから今晚泊めてくれ」

言うだけ言うと男は電話を切った。

「勘定を頼む」

言って男は立ち上がる。と、間合いを計ったように格子戸がガタガタ揺すられた。はつと男は全身を緊張させて格子戸に向かって身構えた。そのしなやかな動きは百戦を錬磨してきた武闘家のようなだった。

「あちゃ、一番はやっぱり甘かったか」

お気楽な声を出しながらパンチパーマの小柄な男がジャンパーのポケットに手をつ突っ込んだまま入ってきた。男はなお用心深く身構えている。

「えーと……」

言いかけてユウヤんはようやく異様な雰囲気に気付いたらしく言葉を切った。

「ユウヤん久しぶりですやん」

しのぶの全く空気を読まないお気楽な声が怪我の功名になったようだ。男は常連かという顔になって全身を弛緩させた。

「勘定を頼む」

改めて男が口にするのと同時に店の電話が鳴り響いた。ありふれた電子音もこういう場面ではすこぶる心臓に悪い。センチとしのぶは顔を引き攣らせた。

「はい、酔鏡です」

主人は目で男を待たせると素早く受話器を取って商売人の声を出した。

「はい、そうですけど……。ええと」

主人が男の方を見遣る。

「いてはります。代わりましょか……。伝えてくれて。もしもし？もし……」

電話は一方的に切られたらしい。

「おたくさんに伝えてくれやそうです。『居場所はバレてる。大人しく顔出せ』言うてはりましたで」

男は大きく舌打ちをして革張りの丸椅子に座り込んだ。椅子が悲鳴のような

軋みを立てた。

「バーボンのお代わりをくれ」

男はぶつきらぼうに言って空のグラスを振った。ユウヤんはしのぶの隣に腰を下ろすとチラチラ男の方を見遣る。

「なんぞ困ったことでも起きてはるんですか？良かったら……」

「ああっ」

ユウヤんの声を遮るようにしてしのぶが大きな声を出した。

「さつき電話で隠し金がどうのって言うてはりませんでした？使い込みって、もしかして横領とか……」

店の空気が一気に凍りつく。

「でも隠し金っていうくらいいやからヤバイ系のお金とかとちやいますのん？……って、あれ？どないしはったんです？」

言うだけ言ってしのぶはようやく客達の表情が引き攣っていることに気付いた。

「横領とは人聞きが悪いやないか」

男はドスの利いた声で言った。三白眼を細めてしのぶを見遣る。

「ちよっと運用したる思うただけや。何倍にもして返すつもりやってん」

「いやいやいや……」

あまりにもベタなセリフにツツコミを入れかけたが、男の目がしのぶを黙らせた。男は出されたウイスキーを煽ると携帯電話を取り出して耳に当てた。

「おう、俺や。どうもヤバそうや。……。資産価値が五分の一に目減りしたから無理もないんやけどな。暫くほとぼりが冷めるまで隠りたいねん。どこぞ宿を押さえてくれ。……。あ、あと店も張られてる可能性がある。エキストラに十人ばかり寄越してくれ。……。そう。住所か？」

男は灰皿の中のマッチを取り上げて住所を告げた。

「……。ああ、待ってるで」

電話を切ると男はまたグラスに口をつけた。

「しかし、聞き捨てならない話です。その話が本当でしたら……」  
センセが切り出した。

「警察にでも通報するか？」

男がセンセの方を面白そうに見遣りながら言葉を畳みかけた。

「好きにしいや。けど、後で困ったことになって俺はよう責任持たんぞ」

脅し文句とも取れる言いようにセンセは言葉を詰まらせたがそれでも気丈に眼鏡の奥から睨み返した。

「まあ、今からでもな遅ないし当事者同士で話し合うんが先ちやうかな。誠意を持って謝ったら相手かて……」

「そんなもんが通用する相手やない」

ユウやんの言葉を打ち消すように男はうっそりと言った。

「さよか。けど、交渉事が必要やったらいつでも言うて。わし、こういうトラブル事の解決を手伝うんが仕事やねん。あ、ユウやんいいいます。大将、めっちゃ腹減ってるねん。なんぞ魚料理出して。あと焼酎の湯割りな」

いつもと変わらないユウやんの口調にセンスも毒気を抜かれたように首を振った。

「ほい。お待たせ。银杏のかき揚げ天蕎麦や。银杏はまだ走りやからほくほくして旨いで。お酒呑まはるやろうから汁はごく少なめにしてある。それからこれれも走り言うんかな。暦酒で秋晴れがもう出てるねん。味がしっかりしてるから料理に負けへんと思う」

センスの前に小振りの井とぐい呑みが並ぶ。

「あたし野菜でちよこつとお腹の膨れるもん下さい。けど、なんでそないなことしはったんです？」

注文のついでのようにしのぶが聞きづらいことをさらっと聞く。

「家族を——喜ばそう思うてな」

「いやいや、そないなことしたかて家族は喜びません。お母さんが泣いてるぞお」

「お袋はどうに亡くなった」

「じゃあ、奥さんが……」

「キレることはあっても泣かん」

「でも、あなたの輝かしい前途に……」

「俺もう六十前や」

「ええと……」

口籠もった。説得のネタがなくなったらしい。

「あ、しのぶです」

男に目顔で聞かれた気がしたのでしのぶは名前を告げた。

「俺か？」

男はしのぶの物問いたげな視線を感じて口を開きかけてなぜか逡巡した。

「……。そやな、テリーとでも呼んでくれ」

カウンターの三人がノリ良くかくんとなる。

「いやいやいや、どう見てもテリーという顔ちやいま……」

睨まれてしのぶが慌てて口を噤む。

「ゆ、由来は何ですかのん？」

あまりのギャップにわけもなく吃りながら隣のユウヤんが訊いた。

「テリー・サバラスって知らんか？」

「ああ、あの禿げ頭の……」

睨まれてしのぶがまた首を竦める。どうもテリーは人を睨む癖があるらしい。「そこを強調すな。刑事コジャックやってたやろ。あの渋い声にそっくりやて皆言うねん」

「それはテリーと言うより吹き替えの森山周一郎に似ているというべきですな。あ、センセと言います。大学の物理学教授をやっています」

空腹だったと見えてあらかた蕎麦を片付けたセンセが次の注文にかかる。

「私も何か魚で揚げ物をもらえますか。あと、秋晴れのお代わりを」

常連たちと主人のやりとりを聞きながらテリーは目を泳がせた。目敏く気付いて主人が声をかける。

「あ、うちはレギュラーメニューでないんですわ。何ぞこんな感じのもんが食べたい言うてくれたら作ります」

それでもあぐねているテリーを見て、

「そやな……。ちよつと変わった餃子を出しましよか」

と主人が助け船を出した。テリーが頷いたので主人は棚から小振りの蒸籠を下ろす。

「ああっ」

不意にしのぶが頓狂な声を上げたのでテリーを含む客たちはぎよつとして

振り返る。

「心霊現象のことすっかり忘れてました。聞いてください。あたし本物の心霊写真に写ってしまったんですわ」

意味不明の日本語を口にしながらしのぶは手提げ鞆に手を突っ込んでこそぞ捜し物をした。

「あつたあつた。これです。見て下さい。これあたしが職場の友達と六甲山に登ったときのんですけどね」

しのぶがカウンターに置いた写真を男達は覗き込んだ。六甲山ロープウエーの降車場を背景にしのおと同年代の娘が写っている。写真の中のしのぶはもちろん素面すまへなのだろう。少しおどおどした目付きでカメラに向かってピースサインを送っている。一通りしのぶともう一人の娘の周りを確かめてからセンスはしのぶに尋ねた。

「どこに写ってるんでしよう？肩に人の顔や手が写ってるわけでなし。背後の岩影が人の顔に見えるわけでなし……」

「いややわ、センス。そないなゲテモンの心霊写真とちやいます。ここにはつきりと写ってるやないですか」

ゲテモノではなくむしろ王道だろうと思いつつ男達はしのぶの指す箇所を見た。しのぶの左手後方、少しピントがぼけているが赤いワンピースを着た女



性が写っている。

「えーと、この女性が実は亡くなっているの？」

「センスが尋ねるとしのぶが目を剥いた。

「ひっどお。好美先輩は元気に生きてはりますよ。勝手に殺さんといて下さい」  
話が見えない。何やら不毛な予感を抑えつつ、センスは訊き直した。

「けどこれは心霊写真なんですよね」

「そう言うてますやん」

「それで、その赤いワンピースの女性が心霊現象なんですよね」

「はい。その通りです」

「でも、その女性は生きてるんですよね」

「生きてますて。さつき、失礼しますって大学出るときに挨拶してききましたもん」

「で、そのどこが心霊なのでしょう？」

「暫く間があった。」

「ああっ」

大きな声を出してしのぶは自分のおでこをペしやりと叩いた。落語でくらしかお目にかからない仕種だ。

「すみません。説明不足でしたわ。その写真好美先輩の生霊なんです」

その野菜、かぼちゃなんですと言うくらい気安さで言って、しのぶは又手提げの中をゴソゴソ探し始めた。

「あ、めっちゃ気になってたんですけど」

探し物をしながらしのぶがテリーに尋ねる。

「エキストラって何ですか？ほら、加藤さんの電話で話してはった」

「盗み聞きかい」

「人聞きの悪いこと言わんといて下さい。聞き耳立てとっただけです」

意味は同じである。

「この店も見張られてる可能性があるからな。手の空いてるやつを十人ばかりここに来るよう手配してん。振りの客を装うてバラバラっと入らせるやる。小一時間程で引き上げる時にそいつらに紛れて脱出しよう言う作戦や。頭良えやろ」

自慢げに話すテリーにしのぶは遠慮なく手を大きく振った。

「いやいや、住宅街の中の居酒屋ですよ。短時間の間に十人以上お客が入って行ったらあからさまに怪しいですよ。ここを見張ってる人は絶対マークします。ましてや、それが固まって店から出て来たら分かり易過ぎです」

にべもなく言っただしのぶは猪口を煽った。鞆を探る手はいつの間にか止まっ  
てしまっている。

「……一理あるな。よっしゃ。出る時もバラや。二、三人ずつ時間差で出てそのどれかに紛れて……」

「いや、その人数で出たら目立ってしやあないわ。バレバレ言うやっちゃ」  
ユウヤンがテリーの巨体を見ながら言った。

「……この作戦は中止やな」

言ってテリーは携帯電話を取り出す。リダイヤルを探る指を店の電話の電子音が遮った。主人はちよつと身構えて受話器を持ち上げた。

「はい。酔鏡です。……はい？テリーさん？……、……。もし、もしもし」

また一方的に切られたらしい。

「加藤の身柄は押さえた。もう逃げ場はない。悪あがきは止めて顔出せ、やそうです」

テリーは三白眼を細めて主人の言葉を聞いていたが、やおら立ち上がると素早く店の入口に移動して格子戸の前で身を屈めた。

「お嬢ちゃん……。ええと、しのぶちゃんか。手鏡持っていないか？」

言われたしのぶは、手提げ鞆に手を突っ込んでしばらく探っていたが、やがて赤い背の丸い手鏡を取り出してテリーの傍らに寄った。

「えらい古風やな」

「お母さんの形見です」

渡された赤い鏡をまじまじと見詰めながらテリーは『おおきに』と呟くと身を低くしたまま鏡を差し上げて外の様子を探った。

「ああっ」

再度、甲高い叫びを上げるしのぶに客達がまた振り向く。

「こんなことしてる場合やなかった。心靈写真ですわ」

テリーは我関せずと脇の小窓を細く開くと鏡をかざして腕を伸ばした。

「あれが生霊やいう決定的な証拠があるんです」

席に駆け戻ったしのぶは再び手提げ鞆の中を探る。

「親爺、ごちそうさん。俺、行くわ」

声に三人が振り返るといつの間にかテリーがしのぶの傍らに立っていた。壁からコートを取って羽織ると札入れから札を出す。

「騒がしうした詫びや。釣りは取っといってくれ。又、落ち着いたら顔出す。だ

いぶ先かもしれんけどな」

テリーはしのぶに手鏡を渡しながら『ありがとう』と言った。

「ええっ、もう行かはるんですか」

名残惜しげにしのぶが言う。

「それらしいのはおらん。近所のおばちゃんやんが立ち話してるくらいや。場所変えるんやったら今しかない」

言いながらテリーは素早く格子戸に向かいかけて、ふと立ち止まった。

「餃子はみんな食べてくれ」

律儀である。もう一度『ごちそうさん』と言ってからテリーは格子戸をくぐり抜けた。客達は弛緩したような溜息をついた。炭火の上のドラフトの響きがなんだか間の抜けた音に聞こえた。

その溜息を吹き飛ばすかのように、何かがぶつかり合う不穏な音が店の外で涌いた。『なんじゃ、おんどれ』テリーのドスの利いた声が響く。

「しのぶさん危ない」

センセの声をよそにしのぶは格子戸に寄って外を見遣った。シヨールを羽織った老婆とカーデイガンを着た小太りの主婦がテリーに組み付いている。巨漢のテリーに二人の小柄な女がまとわりついていて、構図はシユールでユーモラスにさえ見えたが、二人の身のこなしは尋常ではなかった。一方がテリーの腕を固めにかかるともう一人が他方の腕を押さええて反撃を阻止する。相手の隙を突いてテリーが攻撃にかかると、待ち構えていたようにもう一人が死角から襲いかかる。とても、年配の女性の動きには見えなかった。

「ああっ」

しのぶが大きな声を立てた。二人の大柄な男が走ってくるのが見えた。あの二人が敵なら万事休すである。しのぶはセンセとユウやんに状況を伝えようと

したが、こういった際の彼女は清々しいくらいに役立たずである。

テリーは暴れ牛の如く身を振って二人の追従を緩めた。素早くコートを脱ぐと老婆の顔に被せて視界を塞ぐ。コートごとその頭を押さえたまま背後に蹴りを飛ばす。主婦が道の向こうに吹っ飛んだ。

「かつこええ」

自分がそう呟いたことにも気付かぬまま、しのぶは格子戸に齧り付いていた。テリーは体を丸めて飛び掛かってくる二人の男を紙一重でかわすとそのまま道を転がってきた。慌ててしのぶが格子戸を開くとその隙間からよろぼうように這い込んでくる。しのぶが大急ぎで戸を閉めた。

「お早いお帰りで」

カウンター越しに覗き込みながら主人が言った。『一分てとこかな』ユウやんが脇から畳みかける。しのぶがそろそろと顔を上げて外を覗くと店の前には誰もいなくなっていた。テリーは息を弾ませながら身を起こすと格子戸の棧さんを押さえてネジ式の鍵に手を伸ばした。

「ちよ、ちよっと何してはるの」

慌てるユウやんをよそに鍵をねじ込んでいく。

「ちよっと待ち。そういうことしはるんやったら出て行ってもらいます」  
主人の口調が硬く尖った。テリーは片手で主人を制して元の席に座った。

「すまん。十分で良えから時間くれ。ちよつと考える時間があればなんとかかなるから。あと、さっきと同じバーボンのロックを頼む」

主人はまだ何か言いかけたが結局口を噤んだ。

「あいつら予想以上に手強い。それに連携技も知つとった」  
皺くちやになつた背広を脱ぐと壁のフックにかけながらテリーが言った。

「あたしもびつくりしました。とてもお婆ちゃんとお婆ちゃんに見えんかった」  
「いや、あれ二人とも男や。しかも若い。あの格好で立ち話を装うとったからうっかり引つ掛かった」

出されたウイスキーに口をつけながらテリーは続けた。

「けど分かったこともある。向こうの指揮官はこの店が見える位置におる。飛び掛かつてきたタイミングが見事過ぎるわ。あの二人、俺が店出た時は背中向けててんで。扉を見張つとった別のやつが指示を出したとしか思えん。あと、連中はインカムで連絡取り合うてるな。結構、ハイテクや」

「なんだか話が素人離れしてきてませんか。やはりここは警察に出頭して……」  
「よけい話がややこしくなる」

テリーは頑なに首を横に振った。

「ほな、やつぱり当事者間で話し合ったらどうやろ。テリーさんにかて言い分はあるんちゃいます？わしで良かったら付き合いますよ。おっ、旨そうやな」

ユウやんが皿を受け取りながら説得にかかる。

「秋刀魚の蒲焼や。常々思うんやけど、蒲焼が好きな人って、鰻が好きというよりあのタレが好き人が多い気がするねん。ホンマに鰻が好きやったら白焼きの方が楽しめる。だったら別に魚は高い鰻である必要ないやんと考えてるねん。あ、ユウやんの言う通りやで。今すぐそこから出て話し合うべきやと思う」

「二人とも事のでのよう説得するのは止して下さい。何だか気が抜けてしまつてまるで説得力がありませんよ」

センセが酒のお代わりを頼みながら口を挟んだ。

「あたしさつきからすっごい気になつてるんですけど……」

しのぶの前には里芋の衣きぬかつぎの皿が出された。しのぶは『あつっ』と言いながら指を擦り合わせては皮を剥くのに余念がない。

「オーソドックスな塩、柚子味噌、梅肉の三種類に味付けしてみた。バラエティーに富んでる方が楽しいやろ。センセには秋刀魚の竜田揚げや。辛い方が好きやろうから、鷹の爪入れて紅葉の錦を濃くしてあるで」

言いながら主人は揚げ物を盛った皿をセンセに渡し、ぐい呑みに秋晴れを注ぐ。

「どないします？料理出しましたよか？」

センセに日本酒を注ぎ終えて主人はテリーに向き直った。



「ああ、頼むわ」

主人は頷くと蒸籠から料理を皿に盛り始めた。

「あたしさつきからすっごい気になってるんですけど……」  
しのぶが同じセリフを繰り返した。

「お店の電話にかけてきてはる方って誰なんです？」

「さあ、ようわからん。低い男の人の声で『そこにがたいの良い強面の男がおるやろ。ちよっと伝言してくれ』言うて、一方的に喋ると電話切りよるねん」  
「うわっ、それきつと竹内力ですて」

「あのな。俺はトイチの借金なぞしとらん」

何気にテリーもノリが良い。

「けど、お金絡みで追い詰められてるんでしょ。ミナミの帝王の世界ですやん」  
テリーはフンと鼻を鳴らした。主人がテリーの前に白い平皿を出した。

「蒸し餃子や。飲茶的で蒸留酒にも合うで。もともと中国では蒸しと水餃子が主流で焼き餃子は残り物を焼くくらいらしい。ポン酢に辛子でどうぞ」

テリーは箸をつけ掛かったが気が変わった様子で、急いで携帯電話を取り出すとまたどこかに電話をかけた。

「……。おう大林か、俺や。お前今日素面か？……。よっしゃ。ちよっと頼みがあるねん。ハヤブサ宅配便の冷蔵車を一台押さえて今から言う住所まで運転

してきてくれ。……。そう、河野といっしょにな」

「しのぶさん、これをテリーさんのグラスに」

センセはそっとしのぶに小さな錠剤を渡した。

「なんです？これ」

「軽い入眠剤です。眠ってしまいう以外害はありません」

「ええっ、でも」

「乱暴なやり方ですけど、このままでは怪我人が出かねない。彼を眠らせておいて警察に通報すべきです」

「まあ、そうですねえ」

なおも逡巡するしのぶにセンセはいつになく真剣な眼差しを向けた。気押されてしのぶは錠剤を取って振り返ったが、間の悪いことに立ち上がって話しているテリーがグラスを持ち上げてしまった。

「それから俺の分のユニフォームと一番でかいダンボールを調達してきてくれ。……。よっしや、二十分後な」

住所を伝えてテリーは電話を切ってしまった。小さな錠剤は行き場を失ってしのぶの手の中に残った。

「今度は何しますのん」

ユウやんが蒲焼を箸で裂きながら訊く。

「二十分後にハヤブサ宅配便の配達車が店の前に停まる。時間が時間やから普通車やったら怪しまれるかも知れんけどクール便やったら飲食店やし違和感ないやろ。ドライバー二人が降りて来るけどそれは俺の身内や。で、二人は荷物を持って店の中へ入ってくる。荷物の中身はハヤブサのユニフォームや。俺はそれに着替えて大林いうやつとチェンジしてこの店から脱出するいう寸法や」

「けど……」

「あ、大林は俺とどっこいの体格やから着替えたから見分けはつかんで。ま、店に残ってもらわなあかんけど、あいつにはマージャンの貸しがあるからな。それチャラにしたる言うたら二つ返事やった」

意外に周到である。

「あの、電話で言うてはった一番大きいダンボールは何に使うんです」

しのぶが衣かつぎの最後の一個の皮を剥きながら尋ねた。

「一種の保険やな。万一、アクシデントが起きて失敗してもこれがあれば荷物に化けて集荷してもらえる。別の運転手を調達せんとあかんけどな」

ますます周到である。

「しかし、よく宅配車やユニフォームを調達できましたね。ハヤブサ宅配便言うたら山通運輸でしょ」

山通運輸は業界大手の運送会社である。

「どうちゆうことない。ちよつとしたコネや。あ、親爺」

餃子が気に入ったらしくあつと言う間に半分以上平らげたテリーはもう一品何かご飯ものをと注文した。

「ウイスキーと相性の良えご飯ものはちよつと難しいですよ」

「あ、気にせんで良え。ウイスキーは俺にとつたら水みたいなもんや」

「ほなちよつと変わったご飯もん出させてもらおかな。お焦げの餡かけでどないでしょ。あれ元々は中華の四川料理なんです」

「ここまできると私は今日は揚げ物でまじめたい気分です。……何か野菜の天ぷらなど頂けますか」

珍しくセンセは携帯のメールをいじりながら注文した。

「はいよ」

「あの、牡蠣とかありますか？まだ早過ぎるやろか」

しのぶが小首を傾げながら尋ねる。

「いやもう出回ってるで。実りの秋らしくお米と合わせて牡蠣雑炊なんてどない？」

「あ、それお願いします」  
しのぶが顔を輝かせた。

「わし、なんぞ甘いもんが良えなあ」

「出た。いっつもバリキさんが言うてはりますけど焼酎には合いませんよ」

「いや、甘いは旨いやから大丈夫や」

「和菓子系でも良えか？ホンマは俺のおやつにでもしようかと思ってるけど……」

「なんや悪いな。けど良かったら頂戴」

ユウヤんの辞書に遠慮の二文字はない。

「はいよ」

「さて、待つとる間は暇やし、さっきの心霊写真の話でも聞かせてや」

ウイスキーのお代わりを頼みながらテリーは言った。

「あ、そや。また忘れてました」

しのぶは三度鞆の中を探って今度こそ目指す写真を見付けたいらしい。『あったあつたあつた』と言いながらもう一枚写真を取り出した。

「これ見て下さい」

沖繩だろう。先程の女性がサングラスにノースリーブのシャツで写っている。背後の家の屋根にシーサーが載っている。

「これが何か？」

訝るセンスにししのぶは写真の右下を指した。

「日付をよう見て下さい」

2007・8・3・となっている。改めて六甲山の写真を見てセンスは目を剥いた。こちらも2007・8・3・である。

「好美先輩って職場の先輩なんですけど、その日は間違いなく沖縄に旅行に行ってたはずなんです。それがあたしの後ろに写ってるやなんて。先輩よっぽどあたしに伝えたいことがあったんやろか？」

「だったら、さっき別れる時に言っているだろう。」

「それともあたし、先輩に恨まれてるんですやろか？」

しのぶは継るような目でセンスを見詰めた。

「いやや。今晚帰ったらアパートの廊下にぼうっと立ってたりして。それともいきなり夢枕に立つとか」

勝手にパニくるしのぶをセンスが宥める。

「いやいや、他人の空似ということも考えられるでしょう」

「それはないですよ。その赤いワンピース、今日も着てはりましたもん」

「肝心の先輩はなんて言うてはるん」

横合いからユウやんが訊く。

「先輩いつもクールですもん。たぶん、霊の存在なんか信じてはらへんのですわ」

殊に自分の生霊の存在は信じ難いだろう。

「その六甲山の写真見てクスって笑ってお終いですわ。端から相手にしてくれませんか」

センセは『うーん』と言って次の仮説を考えているらしく黙り込んだ。

「そろそろ来る頃やねんけどな」

テリーが時計を見ながら言う。その言葉を待っていたかのように店の前にテレビでお馴染みの宅配車が停まった。

「あ、その心霊写真の謎やったら。どうちゆうことないで。言うかそもそも謎でもなんでもないで」

宅配車から目を離さずにテリーが言った。客達が見守る中、二人の男が降りて来るのが格子戸越しに見えた。二人は車の背後に回ると保冷庫の扉を開く。

「あちや、ユニフォームもあの中かい。凍りついとるんちやうやるな」

嬉しそうに軽口を叩くテリーの顔が次の瞬間凍りついた。

「なんでやねん……」

格子戸に向かいかけたままテリーは呆然と立ち尽くした。

格子戸の向こうで二人のドライバーは黒い服の男達に取り囲まれている。中の一人が携帯電話を取り出すと大林だろう、大柄な方のドライバーに渡した。大林は電話を耳に当てて何か話していたが、みるみる姿勢が直立不動になって

いった。携帯電話を返すと大林は相方を促してそそくさと保冷庫の扉を閉めた。二人はまるで恐ろしいものから逃げるように慌てて車に乗り込むと去って行った。

「もしかして……」

しのぶがぽつりと云った。

「寝返られたんとちやいますか」

ユウヤンが後を引き継いだ。車はなくなつた。ダンボールも手に入らなかつた。一瞬にして宅配作戦は目の前から消えてしまった。

「あの対応の速さから見ても、店はかなり大がかりに包囲されてるみたいですよ」  
センセが妙に冷静に意見を述べた。

テリーは盛大に舌打ちをして丸椅子に座り込んだ。

「あの、どう考えても相手の方が一枚も二枚も上手ですわ。わしも付き合つたから話し合いのテーブルを囲むべきやわ」

ユウヤンが珍しくまじめな口調で説得にかかる。

「いやこの執拗さはただごとやない。それだけ怒りが深い証拠や。こうなつたらほとぼりが冷めるまで身を隠すしか手はない」

「いやいや、言うたら失礼やけどたかが金の問題や。どないやって弁償するかさえケリつけられ……」



「そういう問題でもないでしょう。きちんと警察に行くべきです」  
ユウやんとセンセが二重奏で畳みかける。

「あ、UFO」

いきなり、しのぶが大声を出して壁のパステル画を指した。そちらを振り向いたのはしのぶだけで男達は何事かとしのぶを見詰めている。

「おい、何するねん」

テリーの声をよそに、視線は壁に泳がせたままテリーのグラスにしのぶは手を伸ばす。手から落ちた錠剤がウイスキーにダイブしてポチャンと間の抜けた音を立てた。

「何入れてん」

「え？何のことです？」

白々しくとぼけながらしのぶはグラスの底を見て『あれえ？』と声を上げた。微かに気泡を発しながら錠剤が元の姿のまま沈んでいる。

「案外、溶けんもんなんですね。サスペンス劇場なんかやったら一瞬やのに。へええ、ひとつ勉強になりました」

「……ま、ええわ」

何か言いかけた言葉を呑み込んでテリーはうつそりと立ち上がった。

「勘定頼むわ。それから迷惑ついでにもう一つお願いや。そこの奥、親爺さん

の住んではる生活スペースやろ。裏口から出させて欲しい」

「ようわからはったな」

「その蒸籠は嫁さんがネット通販で買ってるのを見た。関東でしか店頭販売してないそうやな。ということとはパソコンがいるわな。それ以外にも商売に要りそうなファックスや留守電付きの電話が置いてない。厨房に料理に必要な人も置いとかと不便や。家の寸法からして奥に居住空間があるとみた」

言われて主人はにっと笑った。

「当たりや。もう一つ言うと地下もありますねん」

「ええっ、秘密基地ですか？」

しのぶが嬉しそうな声を上げる。

「なんでやねん。酒のカーヴや」

「ああ、なるほど」

センセが声を上げた。

「長年の謎だったんですよ。冷蔵庫はそれつきり。だのに来る度に出される酒の種類が変わっていく。どこに仕舞ってあるんだろうと不思議でした」

「秘密基地の方が絶対良えのに……」

未練がましくしのぶが言う。テリーはコートを羽織ると財布を出した。

「あ、お代はもう充分頂いてます」

主人は手を振って断った。

「ご馳走さん。また落ち着いたら顔出すわ。お焦げの餡かけは皆さんで食べて相変わらず律儀である。テリーは行きかけて立ち止まった。

「あ、忘れるとこやった。八月三日な。第一金曜やろ。よう覚えてるけど、雨が降らんかった今年の八月で唯一雨やった日や。六甲山に登るところやなかったで」

「そういえば、しのぶちゃん八月の第二金曜に六甲山行く言うてなかったか」  
主人が思い出したように言う。

「はい。そやから八月三日ですやん」

「いや、それ第二金曜やないし」

ユウやんがささずツツコミを入れる。

「ええっ。けど写真の日付はそうなってますやん。って、あたしタイムスリッ  
プしたんですか？」

男達はしほし黙り込んだ。やおら、テリーが代表するように言った。

「普通に考えたらカメラの日付設定を間違えていた確率の方が高いな」  
「ああっ」

「大方その先輩も第二金曜に六甲山登らはったんやろ。そら写真見て笑うしか

ないわ」

ユウヤんが笑いを堪えながら言った。

「ほな、また来るわ」

今度こそテリーが店の奥に向かって歩きだそうとした。それを待ち構えていたように三度店の電話が鳴った。度重なる学習効果で主人もさすがにすぐには手が伸ばせなかった。

「嫌な予感しかしませんね」

センセが客達の気持ちを代表するように呟いた。やおら主人が受話器に手を伸ばした。チンと音がする。

「もしもし。……、……。はいよ」

用件を聞くだけ聞くと向こうが切る前に切ったらしい。

『念のために言うとかくが裏口は最初から押さえてある。姑息な手は通用せん』ですて」

「ここはユウヤんが言う通り正面から出て話し合いをされるのが得策と思いますよ」

「話し合いが通じるような相手やない。問答無用でまた半殺しにされるんは目に見えてる」

「また、って……」

「けど、この店に立て籠もっても埒あかんだけやのうて事態を悪くするだけですて。早い内に話し合いに行くべきやわ」

「いやもう手遅れや。あの恐ろしさは半端やないねん。こうなったら高飛びして……」

もはやコントのようなタイミングである。テリーの言葉に被せるように四度、店の電話が鳴った。

「はい。……、……。はいよ」

また主人の方が先に電話を切ったらしい。主人は妙な顔でテリーに伝言を伝えた。

『最後通牒や。五分以内に店から出て来んかったらミヤゾノに戻る』言うてはりました。意味分かります？」

些か自信なさげに伝えた主人の言葉はしかし効果絶大だった。テリーは怖い先生に指名された小学生のように気を付けの姿勢をとって直立不動になった。眉間の皺は更に深くなり額から頬にかけて脂汗がしたたり落ちる。常連達は今にも引きつけを起こして卒倒するのではないかと危ぶんだ。

まるで地獄の門を見詰めるような目付きでテリーは店の格子戸を凝視していたが、やおら縫<sup>す</sup>れるものを探すように店の中に目を泳がせた。その視線がある一点でぴたりと止まる。天啓を得たような顔つきになってテリーはしのぶの

背後に回った。

「えっ？えっ？」

しのぶはふためいて忙しなく首を左右に振って振り返ろうとした。

「すまん」

テリーはしのぶの肩を掴むと軽々と立ち上がらせ、撞木のような太い腕を首に回すと、

「人質になってくれ」

と言った。

「えええっ」

「ちよつと……」

「あのなあ」

「落ち着きなさい」

店主と客達は口々に声を上げて色めき立った。が、容易には近付けそうにない。客達が見守る中、テリーはじりじりとしのぶを引きずるようにして格子戸ににじり寄って行った。

その時、店の中にいる誰一人として気付く者はなかったが店の奥、主人の居住スペースの方から音もなく巨大な影がぬっと現れた。バリキは無言で腰を屈めると音を立てずにテリーの背後に滑るように近付いた。まさにその腕がテリ

ーの肩に伸ばされようとした瞬間、テリーの肩がハッと強張り、左足の蹴りがバリキに飛んだ。不意をつかれたバリキは壁にしたたか背中を打ちつけて引っ繰り返った。

「なんじゃおんどれは」

興奮状態のテリーはしのぶを脇にどかせるとバリキににじり寄る。素早く身を起こすとバリキは跳び下がって間合いを取った。

東大寺南大門の金剛力士像揃い踏み——まさに門の左右から抜け出てきた金剛力士がカウンター脇の狭い通路で対峙しているといった構図だ。

「店の客のしかも一番か弱い娘盾にとって何してるねん」

バリキの声は静かだったが、その分深い怒りが伝わってくる。

「手段選んどうる場合やなくなったんじゃ」

テリーの方はバリキのがたいを面白そうに眺めながらゆっくりと背広を脱いだ。さらに筆取り取るようにワイシャツも脱いでランニングシャツ一丁になる。露わになったその肌を見て客達は慄然となった。新しい物、古い物、無数の傷が胸と言わず腕と言わず散らばっている。中には明らかに刃物傷と分かる物も一つとならずあった。

バリキはその傷に臆することもなく間合いを詰めていった。テリーも半身をずらして狭い空間で身動きし易い態勢になって身構える。

「あろう」

場にそぐわないユウやんの間延びした声が響いた。

「余計なことかも知らんけど五分経ったで」

その声が合図であるかのように店の格子戸が盛大に揺すられ始めた。

「ひいっ」

そのがたいに不似合いな悲鳴を上げて、テリーはしのぶに駆け寄った。乱暴に腕を引き寄せたはずみで銀縁メガネが弾け飛んだ。

「あっ」

異口同音に声を立てる男達をよそにテリーは再びしのぶの首に腕を回そうと手を伸ばした。その時、腕時計のごつい金のバンドが桜色のリボンに引っ掛かった。シュツと音を立ててポニーテールが解ける。

「あっ」

異口同音の声が再び上がった。テリーの腕の中でしゃんと背筋を伸ばしたしのぶは不意に一回り大きくなったような気がした。違和感を覚えたテリーが腕の力を緩めるとしのぶはくるりと振り返った。

緩くウエーブの掛かった長い髪を胸まで垂らした娘がじつとこちらを見ていた。

「あんだ……、誰や」



その目に射すくめられたようにテリーは一步たじろいだ。

「まずはちゃんと、ごめんなさいって言うべきです。——耕作さん」

しのぶはきっぱりと言った。

背後では今にもぶち壊さんばかりの勢いで格子戸が揺すられている。

「ちよつと待って下さいね、かず子さん。今、開けますから」

しのぶがねじ式の鍵に手を伸ばそうとすると途端にテリーこと吉田耕作が慌てふためいた。

「か、堪忍してえ」

先程までの威勢の良さは露と消えて、小さな子供みたいに頭を抱えてしゃがみ込む。

しのぶはちらりと彼を見遣ったがすぐに格子戸に向き直るとキュルキュルと軋む音を立てて鍵を外した。待ちかねたように格子戸が勢いよく引き開けられる。が、じれていたせい勢い余ったらしい。立て付けの悪い格子戸は珍しくノンストップで端まで滑っていき、大きな衝撃音を立てると、そのまま表に向かつて引つ繰り返った。更に派手な音が路地中に響き渡る。

「今、ガラスが割れへんかったか？」

バリキがぼそつと呟いた。

「割れたな。見事に」

ユウヤんが応こたえた。

「あ、大将ごめん」

派手な原色カラーの塊が店に飛び込んできて叫んだ。

「入口のガラスが割れてもうた。あんじよう弁償させてもらうよって堪忍して」  
申し訳なさそうに手を合わせる吉田のおばちゃん。だが、主人は呆然と凝固したまま微動だにしなかった。

「ガラスが割れたんじゃない。ガラスを割ったのです。ガラスに足が生えてるわけじゃあるまいに。全く科学的な思考が……」

センセの繰り言のような文句に耳を傾ける者は誰もいない。

「さ、耕作さん。勇気を持って『ごめんなさい』と言いましよう。そしたらか  
ず子さんもきつと赦してくれます」

周囲の状況に気付いていないのか無頓着なのか、しのぶはマイペースに吉田のおばちゃんの旦那、耕作ちゃんの背中を押した。

耕作ちゃんはふらふらとおばちゃんの前に歩み寄るとひよこつと頭を下げてこう言った。

「ごめんなさい。もうしません」

客達は固唾を呑んでおばちゃんの次のリアクションを見守る。が、あまりにも予想通りの反応だったため、誰もが溜息をついた。

「ごめんで済んだら警察はいらんわい」

ランニング一丁で悲鳴を上げる旦那を引きずっておばちゃんは店の外に出て行った。その直後、客達の耳に届いて来たのは、今夜さんざん語られた。『当人同士の話し合い』と言った穏やかな物音ではなかった。

「しのぶさんは——」

センセは些か疲れたような溜息を一つついてから口を開いた。

「彼が吉田さんのご主人だと気付いておられたのですね」

「あの、申し上げにくいのですが……」

しのぶは気の毒そうにセンセを見遣りながら言った。

「後から入って来られたバリキさんは別として、気付いておられなかったのはセンセだけだと思います」

言われたセンセは目を見張って主人を見遣る。主人はにっと笑って頷いた。「初めてお見掛けする男性がお店に入って来られた時にこう思いました。この方はたまたまこのお店に気付いてふらりと入って来たのかしら？って。ところが、その方は事も無げにギムレットをオーダーしました。ギムレットはジンとライムジュースがないと作れないカクテルです。酔鏡の内装はどう見ても居酒屋で、バーのようには見えませんよね。ですので、この方は一見のお客ではな

く、わたしの知らない常連さんか、この店がジンとライムジュースを常備して  
いてオーダーすればギムレットも出してくれることを知っているどなたかの  
紹介で来られたのだと思いました」

店の外で、未だ不穏な物音が続いている。それに気付いていなさげにしのぶ  
は静かに猪口を傾けつつ話を続けた。

「次にその方はわたしと目が合いました。だのに何の反応も示されなかったの  
です。却ってわたしの方がお酒にむせたくらいです。今までの経験でわたしを  
初めて見た方はマスターに一言忠告されるか、そうでなくても例外なくギョツ  
とした顔をなさるのです」

しのぶはなぜか残念そうに言った。

「それで、この方はわたしの知らない常連さんではなく、わたしの事を知って  
いるどなたかの紹介で来られたんだと思いきりまりました。お店を紹介する時に中  
学生のように見える常連がいたりとも話題にされたのでしよう」

「中学生にしか見えん常連がいてるちゅう話題やった気がするけどな」  
ユウヤんが茶々を入れる。

「マスターは目端の利く方ですから、彼がわたしに反応しなかったのに気付い  
ておられたと思います。それにギムレットはかなり珍しいオーダーですから以  
前どなたがそれを注文されたかも覚えておられたはずですよ。ギムレットをオー

ダーしたことがあって、わたしをご存知の常連さんという情報からマスターが一番にあの男性の素性に気付かれたんじゃないでしょうか？吉田かず子さんのお知り合い。風貌からして恐らくご主人だって」

「なるほど」

「それから、あの方に『隠し金』がどうこうという電話が掛かってきて話が不穏な方向に進み出してから、マスターがわたしに何度もサインを送って下さったんです。それでわたしもあの方がかず子さんのご主人の耕作さんだと気付きました」

「ま、吉田の旦那やと気付いた時点で、これは会社のカネを横領したとかたいそうな話やのうて吉田のおばちゃんへのそくりをくすねたとかいうしようもない話やろうと読んだ。旦那の性格はこの前、散々聞かされたからな。いうことはこれからここで過激な夫婦喧嘩に発展する危険があると察してん。店を壊されてもかなわんしな。六月の一件でおばちゃんがしのぶちゃんには甘いのを知ってたし、テリーさんが実は吉田の旦那やてサイン送つといたらしのぶちゃんのことや、状況を推理して事態に收拾を付けてくれるんちゃうかと期待してん」

「そのサインというのは何なのですか」  
「センスが尋ねる。」

「センスも『あれ?』って思いませんでした? テリーさんに出された料理です。付け出しが『にんにくの芽のピクルス』——マスターは『変わったところで中華風ににんにくの芽を使ってみました』とおっしゃいました。二品目が『蒸し餃子』——マスターは『中国では蒸しと水餃子が主流で焼き餃子は残り物を焼くくらいらしい』と解説されました。三品目が『お焦げの餡かけ』——マスターは『元々は中華の四川料理なんです』とおっしゃいました。どれも今日のテーマの『秋の風』とは無関係ですよね」

「あ」

「少なくとも今までにマスターがテーマを無視した料理を出されるのをわたしは見たことがありません。そして料理を出すたびにマスターはわざわざそれが中華料理であることを解説されています。これってどういうことだろうとわたしは思いました。そして、もしかしたら、これはマスターからわたしに宛てたサインで、この人はわたしのことを知っている常連さんの知人で中華料理の好きな方だよと伝えようとされているのじゃないのかなって気付いたんです」

「にんにくの芽のピクルスを出したときはちよつとした洒落のつもりやっくんけど、どうも雲行きがあやしくなってきたてあせっててん」

主人はつると頭を撫でてにっこり笑った。

丁度熱爛が空になったのでしのぶは徳利を差し出して主人におかわりを頼

んだ。

「すぐに思い当たる方がいらっしやいました。風貌も窺っていた通りなのでか  
ず子さんのご主人で間違いないと思いました。と同時に大騒ぎになっている事  
件が公金横領といった不穏なものじゃないと気付いたんです」  
「最初にしのぶちゃんが言うてたんが気になるねんけど」

主人が口を開いた。

「テリーさんが吉田の旦那やと気付いてなかったんはセンスだけやったって。  
いうことはユウヤンも気付いてたっちゆうことか？」

主人はユウヤンを見遣った。ユウヤンは素知らぬ顔で焼酎を啜っている。そ  
れを見てしのぶは可愛らしい笑い声を立てた。

「いえ、知っていたも何も。今夜ここで起きた籠城事件のお芝居の筋書きを書  
いて演出家と舞台監督を勤めたのがユウヤンなんです」

言われたユウヤンは肩を震わせて笑った。

「かなわんなあ。そやからしのぶちゃんにはバレるでって吉田のおばちゃんに  
も言うててん」

「何もかもタイミングが合い過ぎですよ。まるで舞台袖でお芝居の進行を確認  
しながらきっかけを掴んでキューを出してるみたいでした。これは明らかにお  
店の中のやり取りが外に筒抜けになっていたと考えるべきです」

「……盗聴器ですか」

センスの言葉にしのぶが頷く。

「問題は盗聴器がどこに仕掛けられたかです。予めお店に仕掛けたり耕作さんより先に来ていたわたしやセンスが持っているというのはあり得ませんよね。耕作さんがこのお店にくるかどうかは分かりませんが、ですからその盗聴器は耕作さんが店に入ったことを確認した上で、後から店に来た人物が持っていたと考えるべきです。ユウヤンがお店に入ってきた時のことを思い出して下さい。あの時ジャンパーのポケットに手をつ込んでいました。あのポケットに盗聴器が入っていて、耕作さんが間違いなく店内にいることを確認してスイッチを入れたのではないでしょうか」

言われたユウヤンはポケットに手をつ突っ込むと小さな黒い装置を引っ張り出した。

「ほんま、恐れ入るわ」

言ってユウヤンは照れ臭そうに笑った。

「舞台袖のキャストを用意したのもユウヤンですよ」

「それって店に電話を掛けてきたり、店の外で見張ってた人らのことか？」

主人の質問にしのぶは頷いた。

「かず子さんは、テリーさんがご主人だとわたし達に知られたくなかったみた



いなんです」

「正確に言うとしたのぶちゃんに知られたくなかったということやねんけどな。で、わしの携帯に電話してきて、すぐに謎の組織を調達してくれて無茶言いやってん」

「キャストの陣頭指揮を取られたのは……劇団の主催者さんじゃないでしょうか？」

しのぶは小首を傾げながら言った。

「なんやややこしい話やな」

しのぶの隣に陣取ってさんまの竜田揚げを肴にビールを飲んでいたバリキが口を挟んだ。

「途中参加した俺にはさっぱりわからんで」

「いや、最初から座っていた私にもよくわかりません」

「ほぼ同時に二つのことが起きてしまったから余計に話がややこしくなっているんだと思います。耕作さんがこの店に来られたことと、籠城事件が起きたことは無関係のできごとなんです」

「お待ちどおさん。牡蠣雑炊や」

しのぶの前に小振りの土鍋が出された。

「すごい。なんだか本格的ですね。器によそって出てくるのだと思ってました」

「俺の拘りやねんけど雑炊なんかは土鍋から蓮華で掬って食べた方が美味しいと思うねん。出汁におろし生姜を利かせてあるからあったまるで。九月いつでも夜は寒い。なんせ入口があれやしなあ」

主人は口を開けたままの入口を見遣る。

「センセには岡わかめの天ぷらや。名前の通り火を通すとわかめみたいにぬめつとした食感になるから味噌汁の実なんかに使われるねんけどな、天ぷらも旨いで。ちよつと大葉に似てるかな」

センセは珍しそうに濃い緑の天ぷらを箸で挟むと軽く塩を付けて口に入れた。

「庭に植えとくと夏場は良え日除けになるそうや。それでちよくちよく摘んでは汁の実にしたりするお得な野菜やねんて」

「ユウヤンには：：」

主人が言いかけた時、入口の方で木杵が軋む音がした。皆が振り返ると妙にさつぱりとした顔の吉田のおばちゃんが立っていた。おばちゃんは少し居心地悪そうにその大きな体をもぞもぞさせていたがやがて意を決したように居心地を正すと丁寧に頭を下げた。

「今日はうちの旦那がしようもない騒動を起こしてすみませんでした。ここ勘定は全部うち持ちにさせてもらいますし堪忍したって下さい」

「いや、そこまで奢って頂くいわれは……」

センセが慌てて顔の前で手を振る。

「ええねんて。今日は特別な日やねんから。あ、それから大将、入口のこと堪忍な。明日大工さん寄越すよってに」

言っておばちゃんは店の中に入ってきた。それからぽっかり空いた入口越しに声をかける。

「ほれ、遠慮せんでええから入ったって下さい」

その声を合図に四人の男たちがぞろぞろと店の中に入ってきた。体格は様々だが一様に身のこなしに隙がない。男達と顔馴染らしいユウヤンはカウンターの端に席を移して彼らを隣に座らせた。

「あれ？佐山君はどないした」

「一旦、劇団に戻る言うてはりました。それから合流されるそうです」

小柄な男がユウヤんの質問に答えた。

「ちよつとバリキどいてんか」

バリキを強引にユウヤんが座っていた席に移動させておばちゃんはしのぶの隣に割り込んだ。

「しのぶちゃん、堪忍な。一番怖い思いさせてしもたなあ。ホンマにあのヘタレが……」

言いながらしのぶの肩を抱こうとして大人バージョンになっていることに気付いたおぼちゃんは慌てて手を引っ込めた。

「先程も話していたのですが、私には何が起きていたのかさっぱりわからないんですよ」

センセの質問をおぼちゃんは手を振って制した。

「あ、説明はちよつと待ってな。むっちゃお腹空いてるねん。大将、耕作ちゃんに出す予定やった料理ちようだい。どうせ耕作ちゃんはしばらく復活できへんし」

おぼちゃんがしれつと言う。

「ユウやんお待ちどおさん。熟し柿の羊羹や」

透明な小鉢に賽の目に切った柿がこんもりと盛られている。濃い橙の肌がぬめぬめと光っていた。

「ちよつと待ってな」

主人はユウやんの目の前に小鍋を差し出した。中でアルコールが燃えているのか青白い炎が揺れている。小鍋の中身がたつぷりと柿に注がれて、しばらく青い焚き火のように炎を上げていた。

「ドライジンや。よく混ぜて二、三分置いてから食べて。見た目に反して案外さっぱりした甘さやで。それから、おぼちゃんにはこれや」

主人はフライヤからキツネ色に揚がった塊を深皿に移した。その皿をおばちゃんの目の前に置くと上から湯気を立てている餡を回し掛ける。揚げ物がじゅつと音を立てた。

「へえ、餡かけのお焦げってどうやって作るんかと思うてたけど揚げるんかいな」

おばちゃんは感心しながら海老や烏賊が艶やかに光っている透明な餡を突ついた。

「それでな……」

蓮華の中身に息を吹きかけて冷ましながらおばちゃんが口を開いた。

「夕べちよつと呑み過ぎてしもてな。耕作ちゃんにエツチの話をしてしもてん」

『それはまずいでしよう』、『そらあかんで』とセンセとユウヤんが口々に言った。

「なんで二人がその話知ってるねん」

バリキがビールのお代わりを頼みながら訊いた。

「いやな」

主人が口を挟んだ。

「おばちゃんここんとこ、この店で会う人、会う人みんなにその話しよるねん。おかげで俺は耳にタコができた」

言われたおばちゃんはくふふとドスの利いた笑いを漏らす。『あほらし』とバリキはおおぎような溜息をついた。

「で、よう覚えてへんねんけど、耕作ちゃん、なんやぶっ壊れたような顔してた気がする」

小学校時代の悪夢の再来である。

「朝起きたら、耕作ちゃんの布団がきちんと畳まれとった。自分で朝ご飯の支度をして食器も洗うてる。ご丁寧に洗濯機まで動いとった。これはプチ家出しよったなとピンときてん」

「中学生かいな」

ユウヤんが呆れた。

「家出する時は耕作ちゃん、必ず身の回りの片付けしていくねん。礼儀正しいやろ」

「威張りないな。いうか、そないしよっちゆう家出してはるのん？」

「ま、ここしばらくはなかつたな。放つといてもお腹が空いたら帰ってくるから心配してへんかってんけど、この店の名前もしのぶちゃんのこと喋ってしもてたからそれだけ気になってん。ああ見えて気にしいやから絶対顔出すやろし、しのぶちゃんと鉢合わせる可能性も高い。それで心配になってきてん」

おばちゃんは眉間にちよつと皺を寄せて宙を仰いだ。

「しのぶちゃん口説かれたらヤヤなあて」

「って、そこかい」

バリキがツッコむ。

「それが耕作さんが今日、この店に来られた理由だったんですね」  
しのぶが土鍋に蓮華を戻しながら言った。

「わたし、耕作さんがこの店に来られたのと籠城することになった理由は無関係のできごとなんじゃないかと思っただけですけど……」

「そらそうや。耕作ちゃんの使い込みが発覚したんは今日の昼過ぎのことやもん」

不意におぼちゃんの声が不穏に低められた。

「あたし、五百円玉貯金やってるねんけどな」

一杯になると十万円貯まるという貯金箱にせっせと入れていたという。

「いよいよ使う時が来たから引っ張り出してきてん。ところが持つてみると微妙に軽い気がする。慌てて開けてみたらな……」

おぼちゃんは焼酎を煽ってから続けた。

「中身が全部百円玉になっとなっとな」

一瞬、無言の間が空いた。

「ええと、ただくすねるだけやったら申し訳ないから百円だけでも補填したと

か」

おそるおそるバリキが尋ねる。

「そんなわけないやん。すぐにバレんようにするための姑息なフェイクや」

「なんや巧妙なんか底が浅いんかコメントに迷う隠蔽工作やな」

「なるほど、資産価値が五分の一になったというのはそのことだったんですね」  
「センセが感心したように言う。」

「で、すぐにでも耕作ちゃんつかまえてシメてやりたかってんけどな」

おばちゃんが話を戻した。

「迂闊に携帯に電話したりしたら姿くらませるんは目に見えてる。ここは一つ確実に身柄を押さえんとあかん。夕べの一件があるから十中八九、耕作ちゃんは今晚ここに来る。ここやったら確実に耕作ちゃんを押さえられる。決戦の場はここしかない」と確信してん」

「いや、そないにきっぱりと確信されても困るんやけど」

主人の声はどうもおばちゃんに届いていない。

「それでも二つほど心配事があったん。それで、すぐユウやんに連絡して手伝うてもらおうことにした」

「心配事って何です？」

「一つは耕作ちゃんをスムーズに投降させられるかや。最悪はこっちから店に



乱入することも考えたけど店内の乱闘は極力避けたい」

「極力やのうて、絶対に避けてくれ」

主人が釘を刺す。

「もう一つは他のお客がパニックって警察に通報されたりしたらかなわん。そうならんように誘導する人間が店におる必要があつてん」

「そこが一番の謎なんですけどね。最初からかず子さんが店に来て耕作さんを連れ出せば無用の誤解が生じることもない。なぜ、耕作さんの正体を謎めかして隠す必要があつたのです？」

「耕作ちゃんの正体がバレるのは一番避けなあかんことやつてん」

おぼちゃんのはちよつと言いづらそうにしのおの方をちらちらと見遣った。

「六月の時もしのぶちゃん、えらい耕作ちゃんに同情的やつたし。正体がバレて耕作ちゃんの味方につかれたら嫌やもん」

『それだけ？』一言そう呟いてセンセは絶句した。

「そんなわたしはいつだって……」

「あたしの味方か？」

「いえ、正義の味方です」

妙にきっぱりとしのぶは言った。

「それであれば隠し金を使い込んで組織に追われる謎の男やった。結局は組織

から逃げ切れず投降してその後はどうなったか誰も知らんという演出をすることにしたわけや。ま、素人のわしには荷が重いから知り合いの劇団の座長に頼んでんけどな……。まさか、店に入って数秒でバレとるとは思わなかった」ユウやんにしのぶの推理を説明されたおばちゃんは大仰に溜息をついて嘆いた。

「でも、そんな凝った演出を巡らせても耕作さんが名乗りを上げてしまえばそれまでだったのでは？」

「あ、それはあり得へん。耕作ちゃん見栄っ張りやもん。自分から名乗って『こいつが、あのエツチか』言う目で皆から見られるのんに堪えられるとは思えん。しっかし、偽名使うんやったらもうちよつとマシな名前にしたら良えのに。テリーって何なん」

おばちゃんは笑った。

「せつかくやから、しのぶちゃん。何がどうなつとつたのか解説してや」

途中参加のバリキが興味津々でリクエストした。

「まず最初に耕作さんの携帯電話が鳴って使い込みがかず子さんに発覚したと伝えられました。この電話は耕作さんのお知り合いにかず子さんがお願いされたことですよね」

「うん、近所の遊び仲間頼んだ。あの電話で耕作ちゃんが泡喰って店を飛び

出したら話は簡単やってんけどな」

「その後、このお店で起きたことは大きく二つに分けられます。耕作さんを心に考えるとそれは攻撃と守備と呼んで良いんじゃないかと思うのですけど、要は耕作さんがお店から脱出しようとするアクションとそれに釘を刺すようにお店に掛かってきた電話です」

しのぶは猪口を煽って続けた。

「そのどれもが、耕作さんの読みや行動を見越しているようなものでした。お店に掛かってきた電話は四本ありました。一本目はユウやんがお店に入った直後で『居場所はバレてる』と言いました。二本目はエキストラ作戦を中止するように耕作さんが加藤さんに電話しようとした途端掛かってきて『加藤の身柄は押さえた』と言いました。三本目は耕作さんが裏口に向かおうとした途端『裏口は最初から押さえてある』と掛かってきました。明らかに電話を掛けて来られた方はお店の中の会話をリアルタイムでご存知でした」

しのぶはおかしそうに笑った。

「四本目は少し変わってました。耕作さんが高飛びすると宣言した途端に掛かってきて『五分以内に店から出て来んかったらミヤゾノに戻る』と言いました」

しのぶの言葉におばちゃんが頷いた。

「宮園はあたしの旧姓や」

「実家に帰らせて頂きますということですね」

「あたしが帰ったら実家の面々も黙ってへんやろしな。ややこしいことになるねん」

耕作ちゃんは高校時代、かず子の父に菜切り包丁を持って追ひ回された過去がある。

「それから、耕作さんの脱出作戦ですけど……」

「あの……」

不意に男の声があった。客たちが顔を上げると店の入口に痩せ身の男が立っていた。

「お、佐山君今日はありがとうな」

ユウヤんが声を掛けた。

「いえ、この前えらい世話になりましたし」

佐山君は笑いながら言った。それから『あの……』と躊躇いがちに声を出す。

「ん、どないしたん？入りいや」

「いや、その道路でぶっ倒れてはる方、こちらのお客さんちやいます？」

言われておぼちゃんが『ああ』と声を上げた。

「そういうえば耕作ちゃん忘れとったな」

事も無げに言って立ち上がった。

「最初、耕作さんは道路には立ち話をしていられるお婆さんしかいないと判断して店を脱出されようと思いました」

お婆ちゃんの隣に耕作ちゃんが加わってしのぶの解説が再開された。耕作ちゃんとは別に目の周りに青タンがあるわけでも血を流しているわけでもない。が、妙に姿勢がぎこちなく、体を動かす度にうつつとか、ああとか呻いていた。

「その立ち話のお婆ちゃんというのはこの二人や」  
ユウやんが隣の小柄な二人組を紹介した。

「全国大会まで行った黒帯の猛者やで」

大阪の空手道場の名物コンビらしい。その隣の大柄な二人は道場の後輩だとな乗った。

「どうりで技のキレが良えはずや」

耕作ちゃんがぼやくように言った。

「しかし、私の感覚ではもつと大勢に店を包囲されていた印象があったのです  
が……」

センセが不思議そうに首を傾げる。

「演出ですよ」

佐山君が笑いながら言う。彼が主演女優を引き抜かれてユウやんに助けを求

めた劇団主催者だ。

「舞台劇でも役の数より役者の数はうんと少ないですからね。一人数役なんてのもざらにあります。耕作さんが店から出ようとした時に押さえに行っただのがこの四人。冷蔵車を囲んだのは僕を足して五人。役者はそれだけですわ。ユウヤんの盗聴器が何倍もの人員に見せかけてただけです」

「けど、インカム使った連携なんてよう思い付いたな」  
「まだ不思議そうに耕作ちゃんが言った。」

「劇場スタッフにインカムは常識ですよ」

事も無げに佐山君は答えた。

「大林に渡した携帯で喋ったんは……」  
「言いながら耕作ちゃんが隣を見遣る。」

「あたしや」

大林も河野も耕作ちゃんの部下だそうだ。専務夫人が直々に電話で頭を下げれば直立不動にもなるだろう。手品も種が分かれば他愛ない。

「けど、バリキの乱入には焦ったで、あわや最悪のメンツで店内大乱闘や。いよいよヤバイと思うたから『五分経ったで』て適当なこと言うておばちゃんにフオロ―頼んでん。けどなんで急にバリキが現れたんや」

ユウヤんが首を傾げる。しのぶがおかしそうに笑う。長い髪が肩の上で揺れ

た。

「バリキさんがお店の中で起こっていることをご存知のわけないですから、ただ呑みに来られただけなら入口から入ろうとされたはずですよ。あの登場の仕方は明らかに誰かの救援要請に応えたことを示しています。店内乱闘を避けたがっているはず。さすがに頼むはずはないですから、お店の中の誰かだったということになります。お一人しかいませんよね」

しのぶがセンセを見遣った。

「いや、大まじめだったんですよ」

照れ臭そうにセンセは笑った。

「そういうことが起きないように気い付けてたつもりやってんけど……、そういえば料理注文しながら携帯いじとったな。あん時か」

センセはユウヤンに向かって頷いた。

「しかし、その体の傷は尋常やないです。正直びびりましたよ」

バリキが耕作ちゃんに言う。

「俺の専門は海運や。港湾で荒っぽい沖仲仕押さえよう思うたら修羅場はしよっちゅうやで」

耕作ちゃんは不敵に笑いかけて、『ああっ』と又呻いた。どうにも格好がつかない。

「で」

センセが思い出したように口を開いた。

「今日の本題ですが五百円玉は結局何に使われたんでしょう？」

おばちゃんの直視から目を逸らすようにしながら耕作ちゃんが言った。

「いや、六甲道のパチンコ屋に北斗の拳の新台が入ってな。これがよう当たるらしいねん。俺、元々あの台とは相性良えし、これは千載一遇言うやつちゃうか……ひたい、ひたい」

横合いからおばちゃんが唇をつねる。

「どの口が言うか」

「ひや、この……、おくひが……」

「まさか十万円全部スツてしまったんですか？」

「いやもうちよいやったんやて。雲は流れとったし、ケンシロウの攻撃でレイが……」

「まだ言うか」

口と裏拳が同時に繰り出される。

「結局十万あるはずが二万。えらい目減りや」

「そういえば使う時が来たっておっしゃってましたけど今日は何かの記念日なんですか」



しのぶが期待に目を輝かせて訊く。

「三十二年前の今日、耕作ちゃんにプロポーズされてん」

おばちゃんが身をくねらせて照れる。しのぶが『わあっ』と歓声を上げた。おばちゃんは足元の大きな紙袋の中に手を突っ込むと海苔の缶のような形をした黒い貯金箱を引っ張り出した。

「みなさんの分も含めて今日のこの店の勘定は全部これで払う。足らん分は耕作ちゃんの奢りや」

と高らかに宣言した。店をはるか昔のプロポーズ祝賀会場へと変貌し、客達は否応なしにおばちゃんのハイテンションに巻き込まれていった。

「なあなあ、せっかくやん。今日こそ『風に吹かれて』歌うてえな」

焼酎をボトル一本空けてだいぶできあがってきたおばちゃんが巨体をすり寄せるようにしてねだる。

「そないな曲知らん言うてるやろ。お前もしつこいな」

急に不機嫌な顔になってぶすっと言う耕作ちゃんの目の前には空になったバーボンのボトルが横たわっていた。

「今日はその手は喰わんで。五百円玉貯金の埋め合わせや。歌うてえな」  
おばちゃんが尚も喰い下がる。

「親爺、バーボンもう一杯くれ」

無視した耕作ちゃんの態度にキレたおばちゃんは席を蹴って立ち上がった。

「あの……」

しのぶがおそるおそる手を上げる。

「はい、しのぶさん」

なぜかセンチセが指名する。

「代わりにわたしが歌ってもいいですか？」

予想外の申し出におばちゃんは目を瞬かせて、拍子抜けしたように丸椅子に腰を落した。それから『うん、ええけど……』と気抜けした声を出した。

意を決したようにしのぶが立ち上がる。客達は皆口を噤んだ。些か季節外れになった風鈴の音が夜風に乗って響く。

しのぶは目を閉じてじっと何かを想っているようだった。桜色の口元が何やら楽しげに綻んでいる。じらすように、気を持たせるように長い間があった。

ハウメニイヤーズ マスタマウン トイーグジストウ ビフォーイリズウオー  
シユトウダシ

意外に声量のある柔らかなソプラノが響く。客達は居住まいを正したり、肘

を付いたり思い思いの姿勢を取ってそのメロディに耳を傾けた。耕作ちゃんはウイスキーのグラスを口に持っていていきかけたが又カウンターに戻すと目を細めて聴いていた。が、首を傾げて目を見開くとおや？という顔になる。その巖つい首がゆつくりとスイングし始め、指がカウンターを打ってリズムを取り出す。やがて、首の揺れが大きくなり、記憶をまさぐるように目をぐっと細めると口元を綻ばせた。

ヒズアンサマイフレン イズブローインダウイン ヒズアンサリズブロー  
インダウイン

老境に差し掛かったボブデイランのような渋い歌声が店の中に響いた。時ならぬ拍手が響く中、おばちゃんだけが無然とした顔で腕組みをすると旦那を睨んだ。

「どういことなん？」

「え、何がや？」

満更でもない顔でウイスキーを煽っていた耕作ちゃんが聞き返した。

「あたしがあれだけ言うても歌うてくれんかったくせに、相手が若い娘やったらほいほい歌うんかい」

言いながらおばちゃんの手は旦那のアルマーニのネクタイを締めにかかる。  
「ちよっ、苦しい。何の話やねん」

必死で氣道を確保しながら救いを求めるように耕作ちゃんはしのぶを見遣った。

「あの……」

しのぶが遠慮がちに口を開いた。

「首を締められてるところ申し訳ないのですけど……」

「いや、二人とも申し訳ないとは思ってへんで。たぶん」

「耕作さん、この曲が『風に吹かれて』なんです」

旦那の動きが停まった。まじまじと吉田のおばちゃんを見返す。

「そうなんか？」

おそろおそろ訊く。

「もしかして知らなかった言うオチ？」

呆然となっておばちゃんもおそろおそろ訊き返す。

「そやかて英語のタイトルはブローインザウインドなんやろ」

「ちよっ意識かも知らんけど『風に吹かれて』で通じるやん」

「ええっ、窓がどうのいう曲やろが」

「そら、ウインド違いや」

やる気のない漫才のように二人は茫然自失の掛け合いを繰り返した。

「六月、かず子さんに風に吹かれてを歌って頂いた時、ブロークンだけドネイティブに近い発音を押さえておられるなと思ったんです。それで、もしかしたら楽譜や歌詞カードを読んで覚えたのではなく、レコードから耳で覚えられたんじゃないのかなと考えたんです」

「想い出の曲やからな。一日中レコード聴いっとたら自然に覚えた」

「それでふと思ったんです。英語が苦手だとおっしゃっていた耕作さんも耳からまる覚えしたのかもしれない。だとしたら、曲のタイトル、特に日本語のタイトルを目にされていない可能性もあると思ったのです。つまり、『そんな曲は知らない』ではなく『この曲が風に吹かれてだどご存知ない』のじゃないかと思つて……。それを確かめたくて今度は耕作さんもご一緒についてお誘いしたんです」

「楽譜見たつて読まれへんからな」

ぼそつと、耕作ちゃんが言った。

「ギター弾けるやつつかまえて弾き方教わりながら耳で覚えてん。タイトルは聞いたかもしれないけど忘れたわ。ともかく弾ければそれで良かったし……」

「あーあ。あほらし」

おぼちゃんがわざとらしく大きな声を出した。

「けど、すつきりした。長年の謎が解けたわ。しのぶちゃんおおきにな。結局、この謎解きでもあたしの期待に答えてくれたなあ」

まじまじとしのぶを見ながらおぼちゃんは言った。

「けど、今度会う時はメガネとポニーテールしといてって言うたのに……。そこだけは期待に答えてくれへんかったなあ」

恨めしそうに言う。しのぶは小首を傾げて静かに笑った。

「なあなあ、しのぶちゃん。佐山君が舞台に立たへんかて言うてるで」

カウンターの向こうでユウヤンがおもしろそうに言った。

「いや、絶対舞台映えすると思うんですわ」

佐山君は存外真面目な顔で説得にかかる。けれどしのぶは笑いながら首を横に振った。

「それは無理です。お銚子を二、三本空けないと稽古も始められませんから」  
軒にぶら下がった風鈴が応えるように鳴る。ひんやりとした夜風がぽっかり開いた入口から吹き込んできた。

（第五夜 了）